

二〇一九年度 卒業論文

世親 〈浄土論〉 の題名についての考察

L160119 山口 幸

目次

序論	1
本論	3
第一章 〈浄土論〉の流伝	3
第一節 後世における〈浄土論〉の聖典	
名	3
第二節 「浄土論」と「往生論」の法脈	12
第二章 辻本氏の「無量寿経論」説	15
第一節 「無量寿経論」である理由	15
第二節 文献学的観点から見る「無量寿経論」の正当性	17
第三節 世親の〈浄土論〉の題名について	20
第三章 浄土真宗における〈浄土論〉の名称	22
第一節 親鸞の引用における〈浄土論〉呼称	22
結論	25

註
参考文献

序論

世親（天親とも呼ばれるが、以下世親に統一する。）の著作として知られている『無量寿経優婆提舍願生偈』（以下〈浄土論〉と表記する。）は、中国に伝わりと曇鸞によって註釈され、日本では法然が「三経一論」の一つとして選び取るなど、浄土教の伝統において重視されてきた聖典である。また親鸞は世親を七高僧の一人として数え、『高僧和讃』や「正信念仏偈」で讃嘆するなど、浄土真宗においても世親、そして世親の著作である〈浄土論〉は重要な經典となっている。しかし、〈浄土論〉は菩提流支による漢訳本のみしか存在せず、サンسكريット語の原典は残っていない。そのため、〈浄土論〉の題名をめぐっては「無量寿経」がどの經典を指すのかについて、浄土三部経を指すとする三経通申論、『仏説無量寿経』一経を指すとする大経別信論の議論や、「優波提舍」が〈浄土論〉において、韻文である「願偈」を指すのか、それとも散文である「論」を指すのか等の問題がこれまで議論されてきた。

その中で今回は、〈浄土論〉題名の流伝において今日私たちが使っている『浄土論』『往生論』という名称はどこから生まれたのか、「往生論」「浄土論」という呼称を用いた理由はなぜか、「往生論」「浄土論」以外で呼称することはできるのか、いう三つの問題を取り上げる。見て分かる通り、『無量寿経優婆提舍願生偈』という題は「浄土」「往生」という言葉はない。しかしながら、現在使われている一般的な名称は「浄土論」または「往生論」であり、なぜこのような異なる呼称が使われているのかについて論じていく。〈浄土論〉については何よりも先に、著者が本当に世親であるのかどうかという問題もあるが、ここでは大竹晋氏の研究を根拠に、¹〈浄

土論〉は世親の著作であるということで話を進めていく。

第一章では〈浄土論〉の流伝について柴田泰氏の論文を中心に辿っていく。第一節では〈浄土論〉を諸師の引用や経録の記載に則り、経録と諸師の引用の違い、中国における〈浄土論〉の影響について考察する。第二節では〈浄土論〉の内容を踏まえて、「浄土論」「往生論」という名称をなぜ使用したのか、名称は法脈に沿うのかについて論じる。

第二章では辻本俊郎氏の研究を参考にして「無量寿経論」説を展開する。第一節では辻本氏の研究から「無量寿経論」という名称が〈浄土論〉をあらわすうえで正しい理由とその根拠を明らかにしていく。第二節では経録などの文献学的な観点から、「無量寿経論」という名称の正当性を論じていく。そして第三節で世親〈浄土論〉の題名についての結論を述べる。

第三章では〈浄土論〉の流伝を真宗のみに絞り、親鸞に〈浄土論〉がどのように受け入れられ、その後浄土真宗の中で伝わっていったかを見ていく。第一節で、親鸞の著作の中での〈浄土論〉の引用時の呼称と親鸞が〈浄土論〉を表すときに用いる呼称から、親鸞に至るまで〈浄土論〉の名称がどのように継承されてきたかを明らかにする。

本論

第一章 〈浄土論〉の流伝

第一節 後世における〈浄土論〉の聖典名

序論でも述べたように、〈浄土論〉においてはサンスクリット語の原典が現存しないため、その題号の流伝を辿る時に重要になるのは、中国においての菩提流支の漢訳後の経録の記載や諸師の引用である。そこで、ここではまず、中国における経録の記載や、諸師の主な引用をあげる。柴田泰氏の研究で詳しく取り上げていることから、その議論を参考にしつつ考察を進める。

柴田氏の研究が明らかにしている主な経録の記載、諸師の引用は以下のとおりである。

経録記載

『衆経目録』巻五、六法経等撰（【法経録】、五九四年）

無量寿経論一卷。後魏世菩提留支訳（大正五五・一四一上）。

『歴代三宝紀』巻四、九、一三、費長房撰（五九七年）

（菩提流支訳）無量寿経優波提舍論一卷。晋太元年出、僧弁筆受（大正四九・八六上）。

無量寿経論一卷（一一五上）。

『衆経目録』巻一、彦惊撰（【仁寿録】六〇二年）

（菩提留支訳）無量寿経論一卷（大正五五・一五三中）。

『大唐內典錄』卷一、四、六、八、九、道宣撰（六六四年）

（菩提流支訳）無量壽優波提舍經論。普泰元年、僧弁筆受（大正五五・二六九中）。

無量壽經論。八紙。後魏菩提流支訳（二九五下、三一一中、二二一中）。

『衆經目錄』卷一、静泰撰（【静泰録】六六五年）

無量壽經論一卷。八紙、後魏世菩提留支訳（大正五五・一八六上）。

『古今訳經図紀』卷四、靖邁撰

（菩提流支訳）無量壽經論一卷（大正五五・三六四上）。

『大周刊定衆經目錄』卷六、明佺等撰（六九五年）

無量壽經論一卷。八紙優波提舍造。右後魏普泰元年菩提留支訳。出內典錄（大正五五・四〇七下）。

『開元釈教録』卷六、智昇撰（七〇三年）

（菩提留支訳）無量壽經論一卷。題云、無量壽經優波提舍願生偈、婆藪盤豆造、永安二年於洛陽永寧寺

出、僧弁筆受（大正五五・五四一上）。

『開元釈教録略出』智昇撰

無量壽經論一卷。婆藪盤豆釈、元魏天竺三藏菩提留支訳（大正五五・七三五中）。

『貞元新定釈教目錄』卷九、円照撰

（菩提留支訳）無量壽經論一卷。題云、無量壽優波提舍願生偈、婆藪盤豆菩薩造、永安二年於洛陽永寧

寺出、僧弁筆受（大正五五・八三九中）²

柴田氏の研究を踏まえて見てみると、経録の記載は「無量寿経論」または「無量寿優波提舍願生偈」であり、「往生論」「浄土論」という名称は使用されていないことが分かる。このことについて柴田氏は「経録には『浄土論』の略称が一つもないことで、このことは『浄土論』の略称が後の中国諸師の呼称であることを示す。」³とし、名称が中国諸師独自の呼称であるとしている。

次に、中国諸師の引用についての柴田氏の分析をみていくと、その呼称の引用には、主に法系により違いがみられる。以下に柴田氏による浄土系の諸師の主な呼称を示す。

『観経義疏』卷末、浄影寺慧遠（五二三―五二七）

依往生論、五門為因。一、礼拝門：。二、讚嘆門：。三、作願門：、四、觀察門：。五、廻向門：（大正三七・一八三上）。

往生論中説、二乗種不得往生：。往生論中宣説、女人根缺不生（一八四中）。

『無量寿経義疏』卷下、慧遠

天親作往生偈。女人根缺二乗種、皆不得生（大正三七・一〇七下）。

『安樂集』卷上、下、道綽

天親菩薩論云、略入一法句：（大正四七・七上）。

天親論云、觀彼岸世界相、勝過三界道、究竟如虚空、廣大無辺際（同上…以下同じ七中）。

淨土論云（淨心菩薩）（一九下）。⁴

『淨土論』迦才（年不詳、六四八年以降）

往生論云、大乘善根界：女人及根缺、二乘種不生也（大正四七・八四下）。

往生論說、修五念門、即得往生。何等五念、一者禮拜、二者讚歎、三者作願、四者觀察、五者廻向

（八九上）。

一心讚嘆、願生淨土：往生論註中讚文也（八九下）。

往生論、依報有十七種莊嚴事。正報中、仏有八種莊嚴事。菩薩有四種莊嚴事（八九下）。

往生論、勸人往生也。（九〇中）。

往生論云、女人及根缺、二乘種不生（九一中）。

往生論云、（五念門）（五果門）（九四下―九五上）。⁵

『觀經疏』玄義分、定善義、善導（六一三―六八二）

天親淨土論云、女人及根缺、二乘種不生（大正三七・二五一上）。

天親云、觀彼世界相：廣大無邊際（二六三上）。

讚云、安樂國清淨：功德大宝海（二六三下）。

讚云、正道大慈悲：如鏡日月輪（二六四中）。

讚云、備諸珍寶性：明淨曜世間（二六四中）。

『往生礼讃』善導（智昇『集諸経礼讃儀』卷下、大正四七・四六六中下、四七〇下―四七一中）

天親往生云、〈五念門〉（大正四七・四三八下）。

天親菩薩願往生礼讃偈（四四三上―四四四上）。

『釈浄土群疑論』卷二、四、五、懷感

浄土論与摂論、同是世親菩薩所造：。六浄土論説〈五念門〉（大正四七・三九中下）。

浄土論言、身業恭敬門、礼拝弥陀仏（五四上）。

浄土論言、女人及根缺、二乗種不生（五七下）。

浄土論云、大乘善根界：二乗種不生（六二上）。

今造浄土論、：故云、二乗種不生也（六二上）。⁶

これらの引用から分かるように、浄土系の諸師の引用では「往生論」という名称が使われていることが多く、「浄土論」という名称は道綽から始まっていることが分かる。慧遠や善導の引用を見ると、天親菩薩が造った論、天親菩薩が阿弥陀仏を讃嘆したものとして「天親論」、「天親讃」、さらに短くして「讃」という名称も見られる。浄土系の諸師の引用だけでも、これと決まった名称はなく、道綽や善導のように、同じ書の中でも違う名称で示されていることもある。

次に天台系の諸師の引用についてみていく。

『天台観経疏』智顛偽撰（七世紀後半）

依往生論、二乘不得生：。論女人根缺不生：（大正三七・一九三中）。

『淨土十疑論』智顛偽撰（八世紀前半）

往生論云、女人及根缺、二乘種不生（大正四七・八〇中）。⁷

『觀經疏妙宗鈔』卷六、知礼（九六〇—一〇二八）

無量壽經論、今云往生論是也。天親造有十七成就。至第十六大義門成就中、偈云、大乘善根男：二乘種不生。長行釈云：（大正三七・二二八中）。

『樂邦文類』卷一、二、宗曉（一一五一—一二一四）

無量壽論。往生偈及五門修法（大正四七・一六三中下）。⁸

天台系の諸師の引用においては、智顛偽撰では「往生論」とし、宗曉は「無量壽論」、知礼は「無量壽經論」「往生論」両方の名称を用いていたことが分かる。引用は少ないが、天台系の諸師の中では「往生論」の名称が広まっていたことが窺い知ることが出来る。

次は華嚴系の諸師の引用についてまとめる。

『華嚴孔目章』卷四、智儼（六〇二—六六八）

依往生論、〈五念門〉〈五果門〉（大正四五・五七七下—五七八上）。⁹

『両卷無量壽經宗要』元曉（六一七—六八六）

論説云、女人根缺、二乘種不生（大正三七・一二六中）。

往生論中説五門行（一二八中）。

『阿弥陀經疏』元曉

論説、二乗種不生（大正三七・三四八中）。

論説、女人不生（三四八中）。

論頌言（十四種功德成就、三四九上―三五〇上）。¹⁰

『万善同歸集』卷上、延寿（九〇四―一〇二八）

往生論云、遊戯地獄門者：（趣意。大正四八・九六六下）。¹¹

華嚴系の諸師の引用では「往生論」、もしくは「論」となっている。「論」は「往生論」を省略したものであると推測されるため、華嚴系の諸師の中では「往生論」の名称が広まっていたことが伺える。

次は律系の諸師の引用についてまとめてく。

『法苑珠林』卷一五、九五、道世（六六八年、『諸経要集』卷一に一部重出。大正五四・三下―四上）。

浄土論云、備諸珍宝性、具足妙莊嚴（大正五三・三九七下）。

浄土論云、觀彼世界相、勝過三界道（三九七下）。

浄土論云、（五念門）（三九八中）。

優波提舍論云、觀彼世界相：如竟日月輪（三九九上）。

往生論云、（五念門）（九八七中）。¹²

『観経義疏』卷上、下、元照（一〇四八―一一一六）

往生論云、二種不生（大正三七・二八〇上）。

往生論云、女人根缺皆不得生（三〇四下）。

『阿弥陀経義疏』元照

往生論説、二乗不生（大正三七・三六一中）。¹³

律系の諸師の引用では主に「浄土論」と「往生論」が使われている。しかし、元照の引用では「往生論」のみであるが、道世は「浄土論」「優波提舍論」「往生論」の三つを使用している。道世以外にも複数の名称を使用する師はおり、〈浄土論〉の名称は統一されていなかったことを知ることが出来る。

次は法相系の諸師の引用についてまとめていく。

『観弥勒上生経疏』卷上、基（六三一―六八二）

無量寿経論言。女人根缺、二乗種不生（大正三八・二七四上）。

天親浄土論、無著往生論俱言、報土女人及根缺、二乗種不生（二七七上）。

『法苑義林章』卷七、基

無著天親浄土論言、女人根缺、二乗種等皆不生（大正四五・三七一下）。

『無量寿経連義述文贊』卷中、憬興（一六八一―）

往生論云、念仏即生非別時故。往生論及撰論釈、皆天親造、理必応同（大正三七・一五二上）。

論云、究竟如虚空、廣大無辺際（一五四上）。

論云、（十偈一五五上、下、一五六中―一五七上、一五八上）。

往生論（二偈、一五六上）。

『三弥勒経疏』憬興

若唯論有五門（五念門、但し上生行）（大正三八・三一七上）。¹⁴

法相系の諸師の引用では、基と憬興の両師とも「往生論」の名称を使用していることで、「往生論」は両師に認知されている名称であることを知ることが出来る。しかし、両師とも「往生論」以外の名称も使用しており、法相系の諸師においても（浄土論）の名称は統一されていないことが分かる。

最後に元代以降の諸師の引用についてまとめる。

『蓮宗宝鑑』卷五、六、『浄土或問』『西方合論』卷二、六、一〇など。

往生論。天親菩薩（五念門）。無量寿偈（大正四七・二九二下、三二八下、三三〇上、三九四中、四〇五下、四一八下など）。¹⁵

元代以降の引用ではこれまでの諸師の引用にもみられた「往生論」が使われている一方で、「無量寿偈」のよりにこれまでの諸師では見られなかった新たな名称も使用されている。このことから、時代によって（浄土論）の名称は変化、多様化していったのではないかと推測できる。時代によって（浄土論）の名称が変化していったと考えれば、諸師が複数の名称を使う事にも納得できる。一冊の著書の中で複数の名称を使う師も多く、道綽以

降の引用からその傾向は認められるため、名称の変化、多様化はかなり早い時期から進んでいたことが窺える。

柴田氏の諸師の引用の研究を主に法系に沿ってまとめると、〈浄土論〉の引用は浄土系から法相系の諸師までの広い法系、そして隋から元代以降も続く長い間に行われている。しかし、広く引用されているとはいえず、その数はいずれも少ない。ことから柴田氏は〈浄土論〉の中国における影響について、

『中論』『摂大乘論』『大乘起信論』などのように宗派（学派）に係るほどの大きな影響を与えたわけではなく、註釈書も僅かに『浄土論註』一書である。このことは中国浄土教に与えた影響はさほど大きくなかったことを意味する。それ故に法然の「三経一論」の選択の持つ意味は大きい。¹⁶

とし、中国全土で広く読まれているものの、中国浄土教に与えた影響は大きくはなかったとしている。また、引用された題に「願生偈」がないことで、「中国諸師も本書を「偈」としてではなく、「論」として考えていたのである。」¹⁷とし、中国では〈浄土論〉は論書として理解されていたと指摘している。

以上のことから、法系全体で使われている名称は「往生論」であり、「往生論」は中国諸師で広く認知されていた名称であったことも確認できた。

第二節 「浄土論」と「往生論」の法脈

第一節の疑問として残るのが、なぜ中国諸師はどの経録にもない「浄土論」「往生論」という名称を使用したのかという点である。普通、聖典の題が長い場合、元の一部を取って省略するのが一般的だが、この二つの名称

は「無量寿経優波提舍願生偈」には見られない言葉で省略されている。ここから考えられるのは、「往生論」「浄土論」は世親の安楽国に生まれたいという願いから論がたてられ、安楽国土と阿弥陀仏を讃嘆するという、〈浄土論〉の内容を踏まえたいという名称ではないかと推測される。そこで、本文中に出てくる「往生」「浄土」の数をみていくと以下のようなになる。

〈浄土論〉に記されている「往生」「浄土」の用語数は以下のとおりである。「浄土論 安楽 9（往生安楽国 6）、浄土 1、往生 13（願生・得生・生）。」¹⁸用語数を見てみると、「往生」が十三と他に比べて多いことが分かる。よって用語数のみを見れば〈浄土論〉をあらわすうえで相応しいのは「往生論」であるといえる。実際、中国諸師の引用においても最も広く使われているのは「往生論」であった。一方、「浄土」は用例の中で一番少ない。では、それにもかかわらずなぜ「浄土論」という名称が生まれたのだろうか。

一節において「浄土論」の名称が道綽に始まることは既に述べた。この「浄土論」の名称について柴田氏は以下のように述べている。

浄影寺慧遠以降、「往生論」の略称が多い。（中略）それに比べて「浄土論」の略称は少ない。しかし、何故か道綽―善導―懐感の師資は「浄土論」と呼ぶ。そこには諸師と所謂、善導流（曇鸞……道綽―善導）の立場の違いが予測される。¹⁹

柴田氏の説に従えば、道綽に始まる師弟間に「浄土論」という呼称の法脈があることを知ることが出来る。一方、「往生論」は浄影寺の慧遠からその名称が始まる。そこで、この〈浄土論〉の名称が始まる道綽・浄影寺慧

遠の両者に注目して、なぜこの名称が使われたのかについて考えていく。

まず、両師が〈浄土論〉を引用する著書においての「往生」「浄土」の数を確認する。

浄影寺慧遠(五二三―五九二)『観経義疏』 安楽 0 浄土 18 往生 53

同『無量寿経義疏』 安楽 1 浄土 26 往生 50

道綽(五六二―六四五)『安楽集』 安楽 17 浄土 92 往生 88²⁰

こうして比較すると、〈浄土論〉において浄影寺慧遠は「往生」を重視し、道綽は「浄土」を重視していたことが分かる。このために、両師はそれぞれ「往生論」あるいは「浄土論」の名称を用いたのではないかと考えられる。また、浄影寺慧遠が「往生論」とした理由について柴田氏は、

彼が「浄土」という場合は、弥陀經典の註釈書は別にして、浄土一般、諸仏浄土を考えてよい。慧遠の全体像、とくに浄土観からみて、弥陀浄土を「浄土」という可能性は低い。それゆえ、彼にとって弥陀浄土の往生を説く論書は「往生論」なのである。²¹

と述べている。浄影寺慧遠にとって弥陀浄土に往生することを説く論書は「往生論」であり、「浄土論」とする場合には阿弥陀仏の浄土のみでなく、諸仏の浄土に往生することを説く論書である必要があったことを挙げて

いる。
また、道綽が「浄土論」とした理由については、

浄土教に帰依をした道綽には、当然のことながら論註の影響は大きく、また「浄土」は弥陀浄土を指すと

明言してよい。彼が熱烈に弥陀浄土の往生を願ったことは、まだ在世中に書かれた『続高僧伝』をはじめ、往生伝類が等しく伝えることで贅言を要しない。安樂集に「浄土」「往生」が多いことも今知ったとおりである。道綽の浄土観は明らかに弥陀浄土往生の教えで、熱心な願生者である。それは慧遠と根本的に違っている。²²

と指摘している。道綽にとって浄土といえば弥陀浄土のことであり、この事から道綽にとって阿弥陀仏の浄土へ往生することを説く論書は「浄土論」であったのであるといえる。

このような両師の立場の違いから、〈浄土論〉の名称を浄影寺慧遠は「往生論」とし、道綽は「浄土論」とし、たとえられる。浄影寺慧遠に始まる「往生論」はその後あらゆる法系の諸師の引用で使用されており、道綽に始まる「浄土論」は主に善導そして懐感という師弟間で受け継がれているのである。

第二章 辻本氏の「無量寿経論」説

第一節 「無量寿経論」である理由

「浄土論」は道綽からの師弟間で受け継がれてきた名称であり、「往生論」は浄影寺の慧遠をはじめとした諸師に使用された名称であったことは第一章で述べた。対して「無量寿経論」という題号は最も古い経録の記載であり、経録の記載は「無量寿経論」以降「無量寿優波提舍経論」または「無量寿経優波提舍願生偈」であり、特に

現在の〈浄土論〉の正式な題名とされる「無量寿経優波提舍願生偈」は第一章で柴田氏の研究の経録の記載にあったように、『開元釈経録』に初めてその題が記されている。加えて、「往生論」「浄土論」は経録においては見られないものである。これらの事を踏まえると、〈浄土論〉を表す名称を「往生論」や「浄土論」の他に、「無量寿経論」とする可能性が考えられる。このことについて近年研究をすすめているのが、辻本俊郎氏である。

辻本氏は自身の参加した「浄土経の総合的研究」研究班で蒐集された〈浄土論〉テキストの表題は、

無量寿経優波提舍経 東禅寺版、開元寺版、思溪版

無量寿経優波提舍 磧砂版、杭州版、房山雲居寺石刻本

無量寿経優波提舍願生偈 高麗再雕版

優波提舍願生偈 房山雷音洞石刻本

無量寿経論 正倉院聖語蔵本

無量寿経優婆提舍願生偈 親鸞加点本『論註』に引用された『論』²³

であり、この中には通称としての「往生論」「浄土論」が見られず、また「無量寿経優波提舍願生偈」は高麗再雕版、『論註』に引用された『論』のみである。²⁴このことから辻本氏は現在広まっている「往生論」「浄土論」という名称に対して疑問を持ち、尚且つ正式な題名を高麗再雕版と『論註』に引用された『論』の二本のみが支持する「無量寿経優波提舍願生偈」とする事に対して苦言を呈している。さらに、これらテキストの副題を「無量寿経優波提舍願生偈」とするのが東禅寺版、開元寺版、思溪版、磧砂版、杭州版であり、「優波提舍願生

偈」とするのが正倉院聖語藏本²⁵であることから、「副題を有するテキストはすべて表題に「願生偈」とうたっていない」²⁶ことを指摘しているのである。辻本氏の指摘を参考にすると、表題においてどのテキストも「願生偈」を採用していないということは「願生偈」がいわば付け加えられた補足のようなものであるということであり、正式な題名の中に「願生偈」の文言が入るということは不自然ではないかと考えられる。

加えて、テキストの尾題では「無量寿経優波提舍論」は開元寺版、「無量寿経論」は思溪版、高麗再雕版、房山雲居寺石刻本、正倉院聖語藏本、「無量寿経優波提舍」は磧砂版、杭州版、「無量寿経優波提舍願生偈」は『論註』に引用された『論』²⁷となっていることを踏まえると、表題、尾題と共に合わせてみたときに最も共通しているのは「無量寿経論」であることがわかる。このように、第一章における経録の記載と辻本氏のテキストを照らし合わせてみると、両方に共通するのは「無量寿経論」であり、〈浄土論〉の名称が「無量寿経論」である可能性を裏付けるのである。

第二節 文献学的観点から見る「無量寿経論」の正当性

経録の記載と諸師の引用における〈浄土論〉題名は第一章の柴田氏の研究で明らかにした。よって、上記以外の文献として、辻本氏の研究を参考に大蔵経所収テキスト、石刻本テキスト、写本テキストでの〈浄土論〉題名をあげて比較していく。なお、大蔵経所収テキストにおいては引用数が多いため、第一節でも取り上げた東禅寺版、開元寺版、思溪版、磧砂版、杭州版、高麗再雕版は省略する。また、石刻本テキストにおいては第一節で取

り上げたものと同じであるため、こちらも省略する。

まず大蔵経所収テキストの題名についてみていく。

明版・永楽北蔵 題名「無量寿経優波提舍」副題「無量寿経優波提舍願生偈」尾題「無量寿経優波提舍」

明版・洪武南蔵 題名「無量寿経優波提舍」副題「無量寿経優波提舍願生偈」尾題「無量寿経優波提舍」

清・龍蔵(乾隆大蔵経) 題名「無量寿経優波提舍」副題「無量寿経優波提舍願生偈」尾題「無量寿経優提

舍」

中华民国・頻俱利伽羅 題名「無量寿経優波提舍願生偈」尾題「無量寿経論」

中华大蔵経 題名「無量寿経優波提舍願生偈」尾題「無量寿経論」

縮印大蔵経(大日本校訂大蔵経) 題名「無量寿経優波提舍願生偈」尾題「無量寿経論」

大日本統蔵経(卍統蔵経) 題名「無量寿経優波提舍願生偈」尾題「無量寿経」

大正新脩大蔵経 題名「無量寿経優波提舍願生偈」尾題「無量寿経」 28

大蔵経所収テキストの題は表題が主に「無量寿経優波提舍願生偈」、または「無量寿経優波提舍」、副題があるものは「無量寿経優波提舍願生偈」、尾題は主に「無量寿経論」、「無量寿経優波提舍」である。副題を有するものは表題と尾題が概ね一致しているものの、副題のないテキストにおいては表題と尾題は異なる。それも全て尾題は「無量寿経論」で表されていることが分かる。大蔵経所収のテキストにおいて名称にあたるものは「無量寿経論」のみであり、他の呼称は見られない。

次に、写本テキストにおける題名をみていく。

金剛寺一切経 題名「無量寿経論」副題「優波提舍願生偈」

正倉院聖語蔵 題名「無量寿経論」副題「優波提舍願生偈」尾題「無量寿経論」

七寺一切経 題名「無量寿経論」副題「優波提舍願生偈」尾題「無量寿経論」

光明寺寂恵書写本 題名「無量寿経優波提舍願生偈」尾題「往生論」

常楽寺存覚書写本 題名「無量寿経優波提舍願生偈」²⁹

写本テキストにおいての表題は「無量寿経論」と「無量寿経優波提舍願生偈」であり、副題は「優波提舍願生偈」、尾題は「無量寿経論」または「往生論」である。辻本氏は「正倉院本、金剛寺本、七寺本の三本の写本では「無量寿経論」となっており、これと同じ題名のテキストは全くない。」³⁰として、題名を「無量寿経論」とするのは写本独特のものであると指摘している。

大蔵経テキスト、写本テキスト、石刻本テキストの各〈浄土論〉テキストの題名を比較してみると、テキストの表題、副題、尾題において「往生論」や「浄土論」がほとんど見られないことが分かる。これは、第一章における柴田氏の「『浄土論』の略称が後の中国諸師の呼称であることを示す。」³¹という事実を後押しするものであり、中国諸師独自の略称である「往生論」「浄土論」が〈浄土論〉の略称として相応しいのかという疑問が生まれるのである。しかし、辻本氏が「「往生論」「浄土論」は広く流布した名称であることが認められる」³²としているように、「往生論」「浄土論」という名称は現代まで伝わるものであり、〈浄土論〉を指す呼称であるこ

とは広く認知されているといえる。つまり、「無量寿経論」は経録の記載、知礼や基の引用、テキストの題まで幅広く記されているものであり、対して「往生論」「浄土論」は浄影寺慧遠、道綽から始まる諸師によって生まれたものであり、師弟間などで広まり人から人へ受け継がれてきた名称であるといえる。以上のことから、文献学的観点から見れば、〈浄土論〉を表すうえで相応しいのは「無量寿経論」であるといえる。

第三節 世親〈浄土論〉の題名について

ここまで第一章、第二章と〈浄土論〉の題名について主に柴田氏と辻本氏の研究を参考にして論じてきた。第一章第一節では柴田氏の研究を参考に経録における題名、並びに中国諸師に引用された時の題名を法系に沿って取り上げた。経録においては現在の通称として知られている「往生論」や「浄土論」という言葉が全く認められないため、「浄土論」や「往生論」という名は後の中国諸師が名付けた、特有の名称であることを知ることが出来た。一方、中国諸師の引用においては、「往生論」は浄影寺慧遠をはじめとした広い法系の諸師に使われており、「浄土論」は主に道綽から始まる師弟の間で使用されていることが分かった。

第二節では「往生論」という言葉を〈浄土論〉を表すうえで初めて使用した浄影寺慧遠と、「浄土論」という言葉を初めて使用した道綽の両師に注目し、〈浄土論〉引用における浄土、往生、安樂の用語数や、両師の浄土観に焦点を当てて、何故〈浄土論〉を引用する際に題名を「往生論」または「浄土論」という名称にしたのかという理由について考察した。その結果、用語数において浄影寺慧遠は往生を、道綽は浄土を多く使用していた。

そして「往生論」、「浄土論」とした理由については、浄影寺慧遠にとって浄土とは弥陀浄土のみを指すのではなく、広義的な浄土、浄土一般の事を指すために、弥陀浄土に往生することを説く論書は「往生論」であった。対して道綽にとって浄土とは弥陀浄土を指し、弥陀浄土に往生することを説く論書は「浄土論」であったという両師の浄土観の違いにより、同じ〈浄土論〉を表す名称の違いが生まれたと考えられる。

第二章第一節では、経録の記載の中で最も古い題が「無量寿経論」である点、そして経録の記載には中国諸師の中で広まっていった「往生論」や「浄土論」という名称が使われていない事から、〈浄土論〉のもう一つの名称の可能性として「無量寿経論」が挙げられることを示した。「無量寿経論」の研究を近年すすめている辻本氏の研究では、研究で蒐集された〈浄土論〉テキストの題名に「往生論」と「浄土論」の名称が無いことが明らかにされている。この事を踏まえて考えると、蒐集されたテキストの表題と尾題を比較した時に最も共通しているのは「無量寿経論」であり、第一章での柴田氏の経録の記載と辻本氏が蒐集したテキストの題とを照らし合わせても、両方に共通する題は「無量寿経論」であるということが、「往生論」「浄土論」以外の名称として「無量寿経論」と呼称する可能性を高めていることが分かる。

第二節では、「無量寿経論」という名称の正当性を確かめるために辻本氏の研究において蒐集されたテキストのなかで、第一節で挙げたもの以外の大蔵経収集テキストと写本テキストの題名を取り上げて比較した。大蔵経収集テキストの表題は、主に「無量寿経優波提舍願生偈」または「無量寿経優波提舍」、副題は「無量寿経優波提舍願生偈」、尾題は主に「無量寿経論」、「無量寿経優波提舍」であり、副題を有するテキストは表題と尾題が

一致しているものの、副題の無いテキストにおいては表題と尾題は異なっており、さらに副題のないテキストにおいては尾題が全て「無量寿経論」であった。大蔵経収集テキストにおいて名称と言えるのは「無量寿経論」のみであり、「往生論」や「浄土論」といった他の名称は見られなかったのである。一方、写本テキストにおいては表題が「無量寿経論」、「無量寿経優波提舍願生偈」であり、副題は「優波提舍願生偈」、尾題は「無量寿経論」または「往生論」であった。表題に「無量寿経論」を用いるのは蒐集されたテキストのなかでは写本テキストのみであり、他のテキストでは見られないことから、辻本氏は表題で「無量寿経論」とするのは写本独特のものであるとした。辻本氏の研究において蒐集された各テキストをみていくと、テキストの表題、副題、尾題において「往生論」または「浄土論」という名称はほとんど用いられていないことが分かる。この事によって柴田氏の研究において明らかになった「往生論」、「浄土論」という名称が中国諸師特有のものであるという事実が、さらに裏付けられる。

第三章 浄土真宗における〈浄土論〉の名称

第一節 親鸞の引用における〈浄土論〉呼称

第三章では、親鸞における〈浄土論〉の名称を、親鸞が著作の中で〈浄土論〉を引用した時の呼称、そして親鸞が著作の中で用いた呼称を挙げることで比較する。更に源信や法然との呼称の比較をすることで、師弟間で呼

称が受け継がれてきたかを確かめる。

まず、親鸞の著作における〈浄土論〉引用時の主な呼称と著作の中で用いた呼称を挙げる。親鸞の〈浄土論〉引用時の呼称においては一章と二章でも引用した柴田氏と辻本氏の研究を主に参考にして主な題を挙げていく。

『教行信証』親鸞(一一七三—一二六二)

浄土論、又曰、又論曰。(8) 33

『浄土文類聚鈔』

天親菩薩浄土論云。

『如来二種廻向文』

無量寿経優波提舍願生偈曰。・浄土論曰。

『尊号真像銘文本』

婆藪盤豆菩薩論曰。 34

『入出二門偈』

無量寿経論一卷、優波提舍願生偈、往生論、浄土論。 35

親鸞の著作における〈浄土論〉引用時の呼称は、特に『教行信証』において「浄土論」が多く使われている。

「浄土論」の他にも「婆藪盤豆菩薩論」などがあるが、特に注目すべき点は、親鸞の著作である『入出二門偈』において「無量寿経論」「往生論」「浄土論」という三つの呼称を用いているという点である。この事から考える

と、親鸞は〈浄土論〉の呼称として「無量寿経論」「往生論」「浄土論」の三つの呼称があることは認知していたうえで、その中でも「浄土論」を特に用いていたという事である。しかし、親鸞が「浄土論」という呼称を多く用いるのに対して、親鸞の師である法然は『選択集』において〈浄土論〉を「天親往生論」³⁶と表しており、法然から親鸞という師弟間には道綽から善導そして懐感にみられた〈浄土論〉の法脈における呼称の繋がりは見られない。そのため、親鸞の〈浄土論〉呼称においては、道綽にとっての往生が弥陀浄土への往生だったために、〈浄土論〉を「浄土論」としたように、〈浄土論〉の内容を顧みたらうえて、親鸞にとっても往生とは弥陀浄土への往生であるがために、親鸞は〈浄土論〉という阿弥陀仏の浄土に往生することを説く論書を「浄土論」と捉えたとも考えられるが、法然にとっても往生とは弥陀浄土への往生である。

では、なぜ法然は〈浄土論〉を「天親往生論」としたのだろうか。それは源信の『往生要集』の表現を参考にしたのではないかと考える。源信の著作に『往生要集』があるが、法然は自身で『往生要集』の註釈書を四冊も著すほどに『往生要集』に多大な影響を受けている。源信は『往生要集』において〈浄土論〉を「往生論、往生論偈、世親偈、龍樹偈」³⁷と表しており、法然の呼称は源信の『往生要集』に影響を受けたものであり、『往生要集』の呼称を参考にして「天親往生論」としたと考えられる。つまり、親鸞は〈浄土論〉の内容が弥陀浄土への往生を説くものであったことから「浄土論」とし、法然は多大な影響を受けた源信の『往生要集』を参考にして「天親往生論」としたのでであると推測することができ、この事から同じ浄土観をもつ両師が違う呼称を用いたことが考えられる。

結論

以上、世親の〈浄土論〉の名称において、柴田氏と辻本氏の研究を参考に考察してきた。「往生論」「浄土論」という名称がどこから生まれたのかについては、柴田氏の研究によって現在広く知られている「往生論」や「浄土論」という名称は経録には見当たらず、「往生論」は浄影寺慧遠に始まり、「浄土論」は道綽に始まるという中国諸師特有の呼称であることが明らかになった。そして浄影寺慧遠と道綽が「往生論」「浄土論」という言葉を用いた理由については、両師の浄土観が関係しており、浄影寺慧遠にとっての浄土とは広く浄土一般を指し、弥陀浄土ではなかったことから、弥陀浄土への往生を説く論書である〈浄土論〉は「往生論」であり、一方道綽において浄土とは弥陀浄土を指しており、弥陀浄土に往生することを説く論書は「浄土論」であったという事である。そして、「浄土論」「往生論」以外の名称においては、経録や中国諸師の引用、そして辻本氏の研究における〈浄土論〉テキストに見られた「無量寿経論」「無量寿経優波提舍論」「無量寿論」など、〈浄土論〉多様な名称が存在しており、中でも「無量寿論」においては経録の記載と辻本氏の研究において収集されたテキストの題を照らし合わせたときに最も共通する名称であることが明らかになった。〈浄土論〉を表す名称は、「往生論」と「浄土論」のみではなかったのである。

- 1 大竹晋校註『新国訳大蔵経 法華経論・無量寿経論他』において大竹氏は『浄土論』と他の世親の諸著作との並行箇所を逐一検出し、国訳の註において世親の著作であると指摘している。
- 2 柴田泰「中国仏教における『浄土論』『浄土論註』の流伝と題名(一)」、『印度哲学仏教学』一一、一三三、一三五頁。
- 3 柴田泰「中国仏教における『浄土論』『浄土論註』の流伝と題名(一)」、『印度哲学仏教学』一一、一四三頁。
- 4 柴田泰「中国仏教における『浄土論』『浄土論註』の流伝と題名(一)」、『印度哲学仏教学』一一、一三五頁。
- 5 柴田泰「中国仏教における『浄土論』『浄土論註』の流伝と題名(一)」、『印度哲学仏教学』一一、一三六頁。
- 6 柴田泰「中国仏教における『浄土論』『浄土論註』の流伝と題名(一)」、『印度哲学仏教学』一一、一三七頁。
- 7 柴田泰「中国仏教における『浄土論』『浄土論註』の流伝と題名(一)」、『印度哲学仏教学』一一、一三九頁。
- 8 柴田泰「中国仏教における『浄土論』『浄土論註』の流伝と題名(一)」、『印度哲学仏教学』一一、一四一頁。
- 9 柴田泰「中国仏教における『浄土論』『浄土論註』の流伝と題名(一)」、『印度哲学仏教学』一一、一三六頁。
- 10 柴田泰「中国仏教における『浄土論』『浄土論註』の流伝と題名(一)」、『印度哲学仏教学』一一、一三八頁。

11 柴田泰 「中国仏教における『浄土論』『浄土論註』の流伝と題名(一)」、『印度哲学仏教学』一一、一四〇頁

12 柴田泰 「中国仏教における『浄土論』『浄土論註』の流伝と題名(一)」、『印度哲学仏教学』一一、一三六頁

13 柴田泰 「中国仏教における『浄土論』『浄土論註』の流伝と題名(一)」、『印度哲学仏教学』一一、一四一頁

14 柴田泰 「中国仏教における『浄土論』『浄土論註』の流伝と題名(一)」、『印度哲学仏教学』一一、一三八頁

三九頁。

15 柴田泰 「中国仏教における『浄土論』『浄土論註』の流伝と題名(一)」、『印度哲学仏教学』一一、一四一頁

16 柴田泰 「中国仏教における『浄土論』『浄土論註』の流伝と題名(一)」、『印度哲学仏教学』一一、一四四頁

17 柴田泰 「中国仏教における『浄土論』『浄土論註』の流伝と題名(一)」、『印度哲学仏教学』一一、一四三頁

- 18 柴田泰 「中国仏教における『浄土論』『浄土論註』の流伝と題名(二)」、『印度哲学仏教学』一二、一六四頁
- 19 柴田泰 「中国仏教における『浄土論』『浄土論註』の流伝と題名(二)」、『印度哲学仏教学』一二、一六七頁
- 20 柴田泰 「中国仏教における『浄土論』『浄土論註』の流伝と題名(二)」、『印度哲学仏教学』一二、一六八頁
- 21 柴田泰 「中国仏教における『浄土論』『浄土論註』の流伝と題名(二)」、『印度哲学仏教学』一二、一六八頁
- 六九頁。
- 22 柴田泰 「中国仏教における『浄土論』『浄土論註』の流伝と題名(二)」、『印度哲学仏教学』一二、一六九頁
- 23 辻本俊郎 「『無量寿経論』テキストの検討」、『仏教大学仏教学会紀要』八、二二頁。
- 24 辻本俊郎 「『無量寿経論』テキストの検討」、『仏教大学仏教学会紀要』八、二二頁。
- 25 辻本俊郎 「『無量寿経論』テキストの検討」、『仏教大学仏教学会紀要』八、二三頁。
- 26 辻本俊郎 「『無量寿経論』テキストの検討」、『仏教大学仏教学会紀要』八、二三頁。
- 27 辻本俊郎 「『無量寿経論』テキストの検討」、『仏教大学仏教学会紀要』八、二三頁。

28 辻本俊郎「世親『無量寿経論』の題名をめぐって」、『東アジア研究』五四、八五・八六頁。引用は比較しや

すいよう題、副題、尾題のみに整理した。

29 辻本俊郎「世親『無量寿経論』の題名をめぐって」、『東アジア研究』五四、八六・八七頁。引用は比較し

や

すいよう題、副題、尾題のみに整理した。

30 辻本俊郎「『無量寿経論』写本テキストをめぐって」、『東アジア研究』六一、五七頁。

31 柴田泰「中国仏教における『浄土論』『浄土論註』の流伝と題名(一)」、『印度哲学仏教学』一一、一四三頁

32 辻本俊郎「世親『無量寿経論』の題名をめぐって」、『東アジア研究』五四、八七頁。

33 柴田泰「中国仏教における『浄土論』『浄土論註』の流伝と題名(一)」、『印度哲学仏教学』一一、一四二頁

カッコ内は引用の数を示している。

34 辻本俊郎「親鸞依用の『無量寿経論』」、『東アジア研究』五七、六四・六五頁。引用は題のみに整理した。

35 『浄土真宗聖典全書(二)』、三一五上下頁。ここでは題名、呼称にあたる部分のみを抜粋した。

36 柴田泰「中国仏教における『浄土論』『浄土論註』の流伝と題名(一)」、『印度哲学仏教学』一一、一四二頁

37 柴田泰「中国仏教における『浄土論』『浄土論註』の流伝と題名(一)」、『印度哲学仏教学』一一、一四二頁

参考文献

書籍

大竹晋校註『新国訳大蔵経 法華経論・無量寿経論他』大蔵出版、二〇一一年

小谷信千代『世親浄土論の諸問題』真宗大谷派宗務所出版部、二〇一二年

金子大栄『浄土論講話』文栄堂、一九八八年

平川彰『浄土思想と大乘戒』春秋社、一九九〇年

山口益『世親の浄土論』法蔵館、一九六三年

佛教大学総合研究所「浄土教の総合的研究」研究班編『無量寿経論校異』佛教大学総合的研究所、一九九九年

年

『浄土真宗聖典全書(二)』本願寺出版社、二〇一一年

論文

安達俊英「『浄土三部経』と『往生論』」、『佛教大学総合的研究所紀要』一、一九九九年

佐藤建「道綽禅師の浄土観」、『仏教文化研究』二二、一九七六年

年

柴田泰「中国仏教における『浄土論』『浄土論註』の流伝と題名(一)」、『印度哲学仏教学』一一、一九九六年

柴田泰「中国仏教における『浄土論』『浄土論註』の流伝と題名(二)」、『印度哲学仏教学』一二、一九九七

章輝玉「浄影寺慧遠の浄土観」、『印度学仏教学研究』六六、一九八五年

辻本俊郎「『無量寿経論』テキストの検討」、『仏教大学仏教学会紀要』八、二〇〇〇年

辻本俊郎「世親『無量寿経論』の題名をめぐって」、『東アジア研究』五四、二〇一〇年

辻本俊郎「『無量寿経論』写本テキストをめぐって」、『東アジア研究』六一、二〇一四年

辻本俊郎「親鸞依用の『無量寿経論』」、『東アジア研究』五七、二〇一二年

内藤龍雄「『法経録』について」、『印度仏教学研究』一九、一九七〇年
